

2 国 語

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、12 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のＡ・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 展望台から大海原を眺める。
- (2) 学校の図書館で借りた本を返却する。
- (3) 柔道の大会に出場するために鍛錬を重ねる。
- (4) 小学校の恩師に心を込めて丁寧^{ていねい}に礼状を書く。
- (5) 鑑賞教室終了後、オーケストラの美しい演奏の余韻に浸る。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 矢を放つて的の中心をイ^イる。
- (2) 豊かな自然に囲まれてくら^{くら}す。
- (3) 湖に白鳥のム^むれが舞い降りる。
- (4) 新鮮な魚を漁港から市場までユソウ^{ユソウ}する。
- (5) 人物画のハイケイに描かれた空の青さに心を奪われる。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

高校三年生の「私」は、同級生であるサキ、佐和子^{さわこ}、弥生^{やよい}の三人と映画部に所属している。「私」たちは四人で映画を作り、『リーラ・ノエル』というチーム名でコンクールに応募していた。四人は十二月になっても、放課後欠かさず部室に集まっていた。

その日、部室にいたのは私とサキの二人だけだった。サキは部室の隅でノートパソコンを操作していた。今の時代からは信じられないくらい分厚くて重いノートパソコンは、独特なメトロノームのようなファンの音からメトロ君と名付けられていて、学校にいるときサキはそれで映画の編集をしていた。

(1) 私はその隣で、チクチクと一定リズムで回るファンの音に苛立ちながら、世界史の参考書にマーカーを引いていた。

「ねえ、完璧な演技ってなんだと思う?」

突然、サキが聞いてきた。

振り向くと、いつの間にか窓際に移動していた。編集作業をしていたパソコンは閉じられ、代わりにカメラが握られている。

「ほんとに撮ってるの、それ?」

「完璧な演技。その答えの一つはね、日常を撮ることだと思ってる。」

サキは、停止ボタンを押してカメラを下ろす。本当に撮っていたらしい。

*
「コンテの四ページ。」

そう言われて、はっとする。次の作品の中に、受験勉強で悩むシーンがあった。自分がどんな顔をしていたかなんて覚えていない。でも、サキの様子を見る限り、きっといい画が撮れたのだろう。

「ねえ、私たち、いつまでこんな風に、映画撮れるかな。」

「いつまでって、どういう意味？」

「私はさ、サキと同じ東洋芸大を受けるけど、佐和子は音大、弥生は就職するって言ってる。いつまで、こうしていられるのかな？」

「いつまでも、やりたいと思える限りやればいい。」

サキはもう一度、カメラを私に向ける。だけど、今度は録画ボタンを押さなかった。ファインダー越しに私を見ながら、当たり前のことのように続ける。

「大学生になったって、これから先も、みんなで一緒に映画を撮ろう。」

高校を卒業したら映画部じゃなくなるけど、私たちはいつまでも『リーラ・ノエル』だ。」

「いつまでもってわけにはいかないでしょ。いずれ、私たちは大人になる。」

「大人になったら、なんで映画を撮れないの？」

「いつまでも親の脛をかじってらんないでしょ。自分でお金を稼いで、食べていかなきゃいけない。」

「映画で食べていけばいい。四人で映画を撮り続けたら、いずれそうなる。『リーラ・ノエル』というスタジオを作って、スタッフも増やして、どんどん新しい映像を生み出していく。素敵でしょ。」

たしかに、素敵だと思った。でも、私は、そこまで樂觀的にはなれない。まだアルバイトさえしたことのない高校生だって、サキがカラオケの次の曲を選ぶような気軽さで口にした未来が、どれほど難しいことかくらひはわかる。

(2) 「そんなの、夢物語だよ。」

「夢物語って言葉、好きだよ。夢のない物語なんてくだらない。」

廊下から、駆けてくるように足音が近づいてきた。

ドアが開き、弥生と佐和子が入ってくる。弥生が騒々しいのはいつものことだけど、佐和子まで息を切らせて走ってくるなんて珍しい。

「どうしたの、二人とも。」

「さっき、佐和子の携帯に電話かかってきた。なんか、サキに、繋がらなかったからって。ほら、佐和子の携帯番号も登録してた。だから。」

「落着いて、電話ってなによ。」

「『スピカフィルムフェスティバル』の、短編部門の最優秀賞、私たちだって。」

一瞬、その言葉の意味が理解できなかった。

プロを目指している映画監督や芸術大学の学生たちが参加する、日本有数の自主制作映画のコンクール。それに、高校生の私たちの『追憶の中の君へ』が選ばれた。

サキは一年生のころから目標として口にしていたけど、私は無理だと決めていた。これまで受賞してきた、高校生を対象とした映画コンクールとはレベルが違いすぎる。

サキの方を振り向く。驚いた顔一つせずに、カメラを回していた。おそらく、弥生たちが部室に入ってきたところから撮っていたのだろう。

「お前、もしかして知ってたのかよ。わざと、電話にでなかったのかよ。」

弥生が詰め寄ると、サキはカメラを回しながら答える。

「東京の番号からかかってきたから、そうじゃないかなって思った。それなら、佐和子に出てもらおうと思った。この絵が、撮りたかったから。」

完璧な演技は、日常を撮ること。それはわかるけど、友達を騙してまで

やるなよ。弥生がいつものように騒ぐ。佐和子は、部室の入口で、かみしめるように立ち尽くしている。私は。

「ね、大丈夫でしょ。私たちなら、必ずなれるよ。」

耳元で、サキが囁いた。

それを聞いた瞬間、やっと、実感がわいた。私たちは、すごい。私たちは、無敵だ。

⁽³⁾ 涙がこぼれた。止まらなくなった。

私が泣いているのに気づいて、弥生が静かになる。彼女の目にも涙が滲んでいた。佐和子も、泣いていた。みんな、やっと、私たちに起きたことがわかったのだろう。⁽⁴⁾ サキだけは、計画通りに事が進んだというように笑っていた。

この日から、私たちの世界はめまぐるしく動いた。雑誌や新聞が取材に来て、全校生徒の前で表彰され、ニュース番組にも取り上げられた。授賞式当日は有名な映画監督に絶賛され、東京の大きな映画館で三日間上映された。その日々は、私たちに、これから先、映画で食べていくという自信を与えてくれた。

「卒業しても、これからもずっと、映画を撮ろうね。」

泣きながら、サキのさっきの言葉を思い出して、口にする。

進路が違って、住む街が変わっても、『リーラ・ノエル』という居場所がある限り、私たちは一緒だ。⁽⁵⁾ 私たちはこれから先も映画を撮り続ける。それは、恋愛映画の中で描かれる運命の出会いの瞬間のような、未来への確かな予感だった。

(瀬那和章「わたしたち、何者にもなれなかった」による)

〔注〕 コンテ——映画の撮影台本。

〔問1〕 ⁽¹⁾ 私はその隣で、チクチクと一定リズムで回るファンの音に苛立ちながら、世界史の参考書にマーカーを引いていた。とあるが、この表現

について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 受験に向けた勉強が進まず神経質になっている「私」の様子を、多角的に分析して捉え、音と色彩を描き分けて対照的に表現している。

イ 勉強がはかどらないことで、自分自身に腹を立てている「私」の様子を、時間の経過とともに順序立てて分かりやすく表現している。

ウ 勉強に集中することができずにあせりを感じている「私」の様子を、擬音語を用いて心情と重ねることで、印象的に表現している。

エ 参考書を前にして平静を保つことができない「私」の様子を、味気ない部室の雰囲気とともに描くことで、誇張して表現している。

〔問2〕 ⁽²⁾ 「そんなの、夢物語だよ。」とあるが、私がサキにこのように言っただけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア いずれ社会人となれば、四人で映画の撮影を続けるのは難しいと思っていることを、将来に対して楽観的なサキに伝えたかったから。

イ 映画を撮り続けるためには、撮影の体制を充実させる必要があるということを、カメラを回すことに必死なサキに言いたかったから。

ウ 四人がそれぞれの道に進むことを決めた今、現状維持のままでよいのかと抱いた疑問を、思い切ってサキに投げかけようと思ったから。

エ 日常の様子をカメラに収めるサキの姿から、高校生による映画制作の限界を感じ取り、映画部の解散をサキに提案しようと考えたから。

〔問3〕⁽³⁾ 涙がこぼれた。止まらなくなった。とあるが、このときの私の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 四人の仲間の関係について心配していたが、賞の受賞により状況が劇的に転換し、親密な友人関係を結ぶことができると喜ぶ気持ち。

イ 大丈夫というサキの言葉により、今後撮影する映画は高い評価を得ると確信し、監督として将来やっていく手応えを感じている気持ち。

ウ 弥生と佐和子が受賞を喜びながらも、連絡をもらった際のサキの行動を責めていることから、四人の関係が崩れそうで悲しく思う気持ち。

エ サキの言葉が現実のものとして心に響き、自分たちが成し遂げたことに改めて誇りをもつとともに、その結果に対して感動する気持ち。

〔問4〕⁽⁴⁾ サキだけは、計画通りに事が進んだというように笑っていた。とあるが、この表現から読み取れる「サキ」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 最優秀賞の受賞によって、仲間からの信頼を回復することができるだろうと考え、コンクールへの応募は大成功だったと思っている様子。

イ 受賞した賞は単なる通過点であり、自分の将来の希望を実現するために、仲間と別れて映画の撮影をすることができると喜んでいる様子。

ウ 今回の賞を目標に据えて部の活動が続け、応募した作品に対して自信をもっていたことから、大きな賞を受賞した状況に満足している様子。

エ 以前から賞には興味がなく、思い出として映像に残したいと思っていた仲間の姿を撮ることができ、思い残すことはないと感じている様子。

〔問5〕⁽⁵⁾ 私たちはこれから先も映画を撮り続ける。とあるが、このときの「私」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 勉強に集中できない自分の将来を案じて、『リーラ・ノエル』の活動に時間を費やしてきた生活を後悔していたが、賞の受賞によって、同じ思いをもつサキとだけは一緒に映画を撮影したいと思う気持ち。

イ 自分たちの未来について抱いていた不安が、賞の受賞による喜びを通して自信に変わり、『リーラ・ノエル』として四人で映画の撮影をし続ける未来を思い描いて、共に活動していこうと思う気持ち。

ウ 賞の受賞によって周囲から喝采を浴びたことで、四人それぞれが自分の撮りたい映画を個々に撮るようになって、『リーラ・ノエル』という思い出の場所があれば、生きていくことができると思う気持ち。

エ 目標としていた賞を受賞したことで、高校卒業後に進む予定だった進路を変更し、三年間続けてきた映画部の活動を心の支えとして、四人で新たに設立した『リーラ・ノエル』で仕事をしていこうと思う気持ち。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

宇宙の大原則に「エントロピー増大の法則」がある。エントロピーとは乱雑さのことであり、この世界のすべてのものごとは、時間の経過とともにエントロピーが増大する方向に進む。壮麗豪華な白亜の神殿も年月とともに風化・崩壊し、*フェルメールの傑作でさえも退色し、機器も損耗する。整理整頓してあった机もあつという間にファイルや書類の山と化す。つまりこの世界では、あらゆる秩序はあまねく崩れ、乱雑になっていく方向にしか進まない。（第一段）

価値を生み出すこと。商品を作り出すこと。ビジネスモデルを考案すること。利益を生み出すことは、結局のところ「エントロピー増大の法則」に抗^{あらが}つて、乱雑さの中から秩序を創出することに他ならない。宇宙の大原則に逆らつて行う行為である以上——つまり坂を転がり落ちる岩を止めるようなものである以上——エネルギーがいる。そして、最終的には決して宇宙の大原則には勝つことができないゆえに、止めた岩はまもなく転がり落ちてしまう。⁽¹⁾つまり、ありていに言えば、商行為とは、使ったエネルギーよりも作り出した秩序により大きな価値を創造すること、そしてその秩序が再び無秩序に還^{かえ}るまえに、その状態を転移することである。たとえば、川底の土砂の中から、砂金を取り出してくること。精製は乱雑さの中から秩序を生み出す作業、つまりエントロピーを下げる行為である。だからそこに価値が生まれる。逆に、土砂の中に砂金を混ぜること。足し算なので価値が加算されるように見えて、一瞬にして価値は無に帰す。エントロピーが増大するからだ。いったん混ぜたものを再びセパレーターするには膨大な労力を要する。しかも混ぜることは常に危険を孕^{はら}む。混ぜることで、乱雑さがより拡散することになり、大きなリスクを生み出し

うる。（第二段）

絶え間なく増大するエントロピーと必死に闘っているのは何も商社パーソンだけではない。もつとも果敢にエントロピー増大の法則と対峙^{たいじ}しているのは何あろう、もつとも高度な秩序を維持している私たち生命体である。如何^{いか}にして。（第三段）

私は生命のこの営^いを「動的平衡」と名づけた。（第四段）

生命にとつて、エントロピーの増大は、老廃物の蓄積、加齢による酸化、タンパク質の変性、遺伝子の変異……といった形で絶え間なく降り注いでくる。油断するとすぐにエントロピー増大の法則に凌駕^{りようが}され、秩序は崩壊する。それは生命の死を意味する。これと闘うため、生命は端から頑丈に作ることに、すなわち丈夫な壁や鎧^{よろい}で自らを守るという選択をあきらめた。そうではなく、むしろ自分をやわかく、ゆるゆる・やわやわに作つた。その上で、自らを常に、壊し分解しつつ、作りなおし、更新し、次々とボタンタッチするという方法をとった。この絶え間のない分解と更新と交換の流れこそが生きているということの本質であり、これこそが系の内部にたまるエントロピーを絶えず外部に捨て続ける唯一の方法だった。動きつつ、釣り合いをとる。これが動的平衡の意味である。（第五段）

生命の秩序は、過去三八億年、エントロピー増大という宇宙の大法則と対峙しながら、今日まで連綿と引き継がれてきた。これはエントロピー増大の法則を打ち破ったという意味ではない。打ち負かされそうになりながらも、絶えずずらし、避け、やり過^すしながら、ここまで来た、ということである。つまり生命は大勝することはなかったものの、大敗もしなかった。⁽²⁾動的平衡を基本原理として、（大きく）変わらないために（つねに小さく）変わり続けてきたからだ。（第六段）

動的平衡の原理を、人間の営み、人間の組織に当てはめて考えることが

できるだろうか。生命は、細胞、タンパク質、DNAなどの構築物を作り出しているが、その作り方は基本的には一通りである。これに対して、細胞の解体、タンパク質の分解、遺伝子情報の消去や抑制の方法は、千差万別、何通りもあり、いついかなるときでも分解が滞らないように、何重にもバックアップが用意されている。つまり生命は、作ることよりも、壊すことのほうをより一生懸命にやっている。これは第一義的にはエントロピー増大を防ぐためだが、もう一つ重要な意味を持つ。それは、つねに動的な状態を維持することによって、いつでも更新でき、可変であり、不足があれば補い、損傷があれば修復できる体制をとっているということだ。だからこそ生命は、環境に柔軟で適応的であり、進化が可能になる。そして動的平衡において重要なのは構成要素そのものよりも、その関係性にある、という点だ。(第七段)

自動車は走りながら故障を直すことなどできない。それは構成要素の機能分担が一義的に決まっていて、しかもその役割が機械論的なアルゴリズムの中に一義的に固定されているからだ。どれか一つが壊れれば交換するしかない。(第八段)

しかし生命の構成要素(細胞、タンパク質、遺伝子など)は、絶えず更新され、動的であるがゆえに、その関係性は可変的で柔軟だ。もし何かが欠落したり、不足したとしても、増減を調整したり、ピンチヒッターになりかわったり、バイパスを作ったりして、問題にすぐに対処できる。構成要素はどれも基本的には多機能性であり、異なる役割を果たしうる。(第九段)

さらに大切なことは、生命の動的平衡は自律分散型である、ということだ。個々の細胞やタンパク質は、ちょうどジグソーパズルのピースのようなもので、前後左右のピースと連携を取りながら絶えず更新されている。ピース近傍の補完的な関係性(相補性)さえ保たれていれば、ピース自体

が交換されても、ジグソーパズルは全体としてゆるく連携しあっており、絵柄は変わらない。(第十段)

新しく参加したピースは、郷に入っては郷に従うの言のとおり、周囲の関係性の中で自分の位置と役割を定める。既存のピースは、寛容をもって新入りのピースのために場所を空けてやる。こうして絶えずピース自体は更新されつつ、組織もその都度、微調整され、新たな平衡を求めて、刷新されていく。(第十一段)

⁽³⁾ ちようかんてき そして個々のピースは、いずれも必ずしも鳥瞰的に全体像を知っている必要はない。ローカルで、自律分散型で、しかも役割が可変的であること。これが生命体の強みである。生命は自律分散的な細胞の集合体であり、各細胞はただローカルな動的平衡を保っているだけだ。脳は生命にとつて実は「中枢」ではない。むしろ知覚・感覚情報を集約し、必要な部局に中継するサーバー的なサービス業務をしているにすぎない。情報に対してどのように動くかはローカルな個々の細胞や臓器の自律性に委ねられる。(第十二段)

かつてサッカーの監督と対談したときのこと。読書家の監督は、私の動的平衡論を読んで、高く評価してくださった。そして、これは組織論としても応用可能だ、各選手が、自律分散的に可変性・相補性をもって状況に対応できれば最強のサッカーが実現される、という主旨のことをおっしゃってくださった。(第十三段)

この議論をさらに進めれば、自律分散的な動的平衡のサッカーにおいて、少なくとも試合のまったただ中においては、いちいち指示を出す必要のないゲームが実現するだろう。おそらく理想の組織とはそういうものではないだろうか。(第十四段)

(福岡伸一「動的平衡3」による)

〔注〕 フェルメール——十七世紀のオランダの画家。

凌駕^{りようが}——他をしのいで、その上に出ること。

アルゴリズム——問題を解決するための手法・手順。

〔問1〕 つまり、ありていに言えば、商行為とは、使ったエネルギーよりも作り出した秩序により大きな価値を創造すること、そしてその

秩序が再び無秩序に還^{かえ}るまえに、その状態を転移することである。

とあるが、「使ったエネルギーよりも作り出した秩序により大きな価値を創造すること」とはどういうことか。次のうちから最も適切な

なものを選べ。

ア 乱雑化に抗うために使う労力よりも、普遍的な原理を創造することによって、強力にエントロピー増大の法則を克服すること。

イ 乱雑さの中から秩序を創出するために消費したエネルギーよりも、創出させた秩序によって、大きな利益を生み出すということ。

ウ 宇宙の大原則に挑む労力よりも、混ぜることで高まった価値が導く秩序によって、小さな労力で乱雑化を回避できるということ。

エ エントロピー増大を止めるために使う時間よりも、ビジネスモデルの考案によって、効率的な秩序の創造ができるということ。

〔問2〕 この文章の構成における第三段の役割を説明したものとして最も

適切なものは、次のうちではどれか。

ア 前段で述べた内容を受けて、乱雑化という課題に対する具体的な解決方法を示すことで、筆者の論旨を理解しやすくしている。

イ 前段で述べた内容を受けて、生命の本質に関わる自説の根拠となる事例を並べて紹介することで、論の妥当性を主張している。

ウ 前段で述べた内容を受けて、エントロピー増大の法則について順序よく整理しながら説明することで、問題の所在を明らかにしている。

エ 前段で述べた内容を受けて、筆者の主張である生命の維持につながる新たな視点を提示することで、論の展開を図っている。

〔問3〕 動的平衡を基本原理として、(大きく) 変わらないために(つねに小さく) 変わり続けてきたからだ。とあるが、「(大きく) 変わらないために(つねに小さく) 変わり続けてきた」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 生命が、自然の摂理に打ち負かされないために、強固な防御体制を少しずつ構築していくことで、自らを危機から守ってきたということ。

イ 生命が、宇宙の大原則に支配されないために、少しずつ分解と更新を行い、自らの内部にエントロピーを蓄積させ続けてきたということ。

ウ 生命が、致命的な秩序の崩壊を招かないために、自らを柔軟にして分解や更新を少しずつ行い続けて、釣り合いをとってきたということ。

エ 生命が、自らの大規模な崩壊を防ぐために、個体の構成要素を不変にすることで、危機を乗り越える強さを徐々に備えてきたということ。

(3)

ちようかてき

〔問4〕そして個々のピースは、いずれも必ずしも鳥瞰的に全体像を知っている必要はない。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 生命体を構成する個々のピースは、周囲のピースと連携して絶えず作り直されながら、全体として相補的に平衡を保っているため、個々のピースがその生命体全体を把握している必要はないと考えているから。
- イ 生命体を構成する個々のピースは、近傍と補完的な関係性をもちながら、脳からの指示・命令を直接受けて動いているため、個々のピースがその指示系統全体を把握している必要はないと考えているから。
- ウ 生命体を構成する個々のピースは、ジグソーパズルのピースのように固有の形によって位置が決められ、平衡を保っているため、個々のピースが自分の立場を把握している必要はないと考えているから。
- エ 生命体を構成する個々のピースは、それぞれに割り当てられ固定された役割を果たすことで、全体の機能を維持しているため、個々のピースがその役割の意味を把握している必要はないと考えているから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「理想の組織」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

次のAは、松尾芭蕉に関する対談の一部であり、Bは対談中で話題にしている芭蕉の言葉が引用されている「三冊子」の原文である。

で囲った文章はBの現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

山本 利休と芭蕉という題目は、結局芭蕉が『笈の小文』という紀行文の冒頭に書いた有名な文句に、芸術の四人の先達のことを、「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休の茶における貫道するものは一なり」と言った真意を尋ねることです。そこに芭蕉が自分の精神的な先達として利休の名をあげているということです。わたくしは利休と芭蕉とは、やった仕事は非常に違うけれども、しかしその精神は共通しているものがあるように思えるのです。利休と芭蕉とどこで一致し、どこで違うところかという感じがしたんです。少し自由な立場で考えてみたらどうだろうかという感じがしたんです。井上 芭蕉はその自分の尊敬する先輩芸術家の選び方というのは的確ですね。

山本 ええ、わたくしもね、この四人の選択に芭蕉の一つのある大事な心の傾向が、はっきり表れていると思います。それは一体どういうことだろうと、いろいろ考えたんですけどね。そしてまたこの四人をあげたことで、日本人の芸術観、あるいは東洋人の芸術観といってもいいのかもしれないけど、とにかく日本人の芸術観と、ヨーロッパ人の芸術観はかなり違った面があるということを物語っているんじゃないかと思うんですよ。というのは、利休がどうして芸術家なのか。作品

はなにも残していないじゃないか。ああいう、お茶なんていうものはちつとも形の残らないものですね。ああいったものを芸術と認める伝統が日本にあるわけですね。

井上 そうですね。

山本 やっぱりね、芸術ははっきり形として残す、記念碑的なものを残す、造形することなんです。ところがお茶は、何を残したか。もちろん利休はなんかを残してる。利休が作った茶室だとか、庭だとか、あるいは花筒を作ったり、茶さじを削ったりしたということはあるわけだけれども。そういうことは末の末なんです、ほんとの目標は、やっぱり茶室で茶を主客飲み合うという無形のことでしょうからね。これは一つも形は残らない。

井上 あれなんかある鑑賞の仕方といったようなもの、そういうものに非常に仕事の上で共感するものがあるんでしょうかね。

山本 ウン、芭蕉と。

井上 芭蕉と利休のあいだに。ぼくはあの連歌や連句というものがなかなか鑑賞できないんですがね。

山本 むずかしいですね、あれは。

井上 ただあれがすばらしいものだろうなということはわかりますね。確かにあれはあの場に自分も一員として参画し、自分もほかの人の発句を鑑賞して、それらを理解して、そしてそれをさらに進めていくような形で自分のものを出していくわけですね。⁽²⁾よほどちゃんとした鑑賞というのが行われないとできない。

山本 そうですね。

井上 ですから、わたしならわたしは第三者として、あとになってあれを読むと、なかなか理解できないですね。だけど、その喜びはお茶、茶室におけるいわゆる一期一会いちごいちえですけど、茶室における喜びも消えると同じように消えるんでしょうね。

山本 ⁽³⁾消えるんです。そこなんです。そこをね、わたしは一致点の一番大きな根本だと思う。

井上 ああ。そうですか、わたしもね、なんとなく漠然とそんなことを感じたんです。

山本 だからね、芭蕉の連句というものの、あれはその座敷ざしきで、ある空間です。ね、何人かの主客が一座して、そして連句を巻くという、その純粋な、煮詰められたように密度の高い空間と時間とを持つことが、究極の目標なわけです。それを記録として懐紙*に書いて、作品が残ります。ね。だけどそれは、その時の楽しみの滓*かすだということです。

井上 ほんとうですね。

(中略)

山本 利休はやっぱり和歌なんかを非常によく読んでて、定家さだいえとか、あるいは新古今の歌ですね、そういったものを非常によく読んでて、それを自分の芸術境地の観念的な目標にしています。

井上 ええ、利休の教養もたいしたものです。芭蕉のあの持つてる教養というのはいすこいとほですね。中国の文学の教養もすこいとほです。杜甫なども出てきま

山本 杜甫はもう一番好きだったんですね。それから日本の古典でしょうけど。しかし、そういう教養プラス彼の人生教養なんです。つまり、いろんな人間の心をよく知ってたということでしょうね。

井上 そうですね。

山本 農民でも、町人でも、武士でも、お公家くげさんでも……。そういうことから見ると西鶴*ざいかくよりもよっぽど広いですよ、人間を知っている幅が。

井上 なるほど。

山本 それは、発句じゃわかんない。連句でわかる。

井上 連句でわかるんですか。

山本 連句でわかるんです。

井上 はあ。

山本 ⁽⁴⁾芭蕉の言葉で、「東海道の一筋も知らぬ人、風雅に覚束おぼつかなし」というのがあります。これは言わば、芭蕉と一緒に俳諧をやる連中の資格を言った言葉なんです。資格としてはやっぱり一度でも人の往来のはげしい東海道を旅して、いろんな人たちの人生に触れて、豊富な人生智じんせいちを蓄えているということですよ。

井上 そういうことですね。

(井上靖、山本健吉ほか「歴史・文学・人生」による)

B 旅の事、ある俳書に、「師いはの曰く、連歌に旅の句三句つづき、二句にてするよし。多く許すは神祇*しんぎ・釈教*・恋・無常の句、旅にて離るる所多し。今、旅・恋難所にして、また一節この所にあり。旅体の句は、たとひ田舎にてするとも、心を都にして、逢坂*あふさかをこえ、淀*ふちの川舟かはふねにのる心持、都の便求たよりむる心など本意とすべし、とは連歌の教をしへなり」とあり。

また、「東海道ひがしこうの一筋もしらぬ人、風雅におぼつかなし、ともいへり」とあり。

(「新編 日本古典文学全集」による)

旅の(句の)こと(については)ある俳書に、「芭蕉先生の言われるには、『連歌では旅の句は三句続き(であるが、俳諧では)二句(続き)でするのがよい。多く(続けるのを)許すのは神祇・釈教・恋・無常の句(であって、その種の句は、次の付句が)旅(の句)で転換する場合が多い。当世では、旅と恋との句は(付け方が)むつかしく、(それだけに)又ひとかどのおもしろさもこの(旅と恋との句の)個所にある。(旅の様子)の句は、たとえ田舎で(連歌)を作るときでも、心を都に置いて、逢坂の関を越えるとか、淀の川舟に乗っている気持ちとか、都へよき言づてを頼む気持ちなどを本意にするのがよい」とは連歌の教えである』とある。又、『東海道の一つさへ旅したことのないような人は、俳諧の方でも頼りない』とも言われた」とある。

(森田峠「三冊子を読む」による)

〔注〕 三冊子——江戸時代の俳人服部土芳が著した俳論書。

宗祇——室町時代の連歌師。

連歌——「俳諧の連歌」のこと。和歌の上の句と下の句を互いに詠み続けていく歌の形式。

貫道するものは一なり——(芸道を)貫いているものは同一である。

連句——「俳諧の連歌」の別称。

懷紙——連歌を書き留める和紙。

滓——良い所や必要な部分を取り去ったあとの残りの部分。

西鶴——井原西鶴。江戸時代に活躍した文化人。

神祇——天の神、地の神のこと。

釈教——仏教の教え。

逢坂——逢坂山。現在の滋賀県にある。

淀の川舟——淀川を伏見から大阪へ下る川船。

〔問1〕 ええ、わたくしもね、この四人の選択に芭蕉の一つのある大事な

心の傾向が、はっきり表れていると思います。とあるが、「芭蕉」の「心の傾向」を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 芭蕉は利休が作った茶室や庭に芸術性を見いだし、茶そのものではなく、利休の残した様々な作品について高い価値を認めている。

イ 芭蕉は利休の残した茶の文化の精神性を尊重しており、西洋人と東洋人の芸術観について比較する上で、利休が適していると思っている。

ウ 芭蕉は自分の目標として利休の名をあげており、他の三人の先達と比較をすることで、利休の芸術性の高さを広く伝えようとしている。

エ 芭蕉は四人の先達の一人に利休をあげており、有形のものだけではなく、主客で茶を飲み合うといった無形のものも芸術として捉えている。

〔問2〕 ⁽²⁾ よほどちゃんとした鑑賞というのが行われないうとできない。とあるが、ここでいう「ちゃんとした鑑賞」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 連歌・連句への理解があり、句を進めていくために、参加者同士が他者の発句の内容に加えて相手の意図や思いをくみ取っていくこと。

イ 連歌・連句への理解があり、参加していない第三者に対して詳しく説明するために、相手の創作した作品を正確に記憶しておくこと。

ウ 連歌・連句への理解があり、作品の良い点や改善点を明確に伝えるために、発句の特徴について理論的に筋道を立てて批評すること。

エ 連歌・連句への理解があり、後世の人に連歌・連句のすばらしさを残していくために、その場の雰囲気や発句を詳細に記録しておくこと。

〔問3〕消えるんです。そこなんですよ。そこをね、わたしは一致点の一番大きな根本だと思う。という山本さんの発言が、この対談の中で果たしている役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 井上さんの、茶の文化に関する発言について疑問を抱き、それまでの対談の内容と別の事例を示すことで、具体的な発言を引き出している。
- イ 井上さんの、一期一会に関する発言に賛同し、自分のもっている考えと共通する内容について強調することで、話題を焦点化させている。
- ウ 井上さんの、連歌・連句に関する発言を不思議に思い、新たな視点として自分の独自の考えを述べることで、対談の内容を深めている。
- エ 井上さんの、発句の鑑賞に関する発言に共感し、感覚的な言葉を用いて自分の解釈との違いを示すことで、話題の転換を図っている。

〔問4〕「東海道の一筋も知らぬ人、風雅に覚束なし」とあるが、おぼつかの現代語訳において「風雅に覚束なし」に相当する部分はどこか。
次のうちから最も適切なものを選び。

- ア 転換する場合が多い
- イ 本意にするのがよい
- ウ 旅したことのない
- エ 俳諧の方でも頼りない

〔問5〕 Bの中の――を付けたア～エのうち、現代仮名遣いで書いた場合と異なる書き表し方を含んでいるものを一つ選び、記号で答えよ。